

月刊

ダンゲロス

2011

6

魔人10選「山乃端一人」
「魁!!ダンゲロス」インタビュー
大食いは愛。あるいは、ろれるり
一刀両断、色を知る季節 架神恭介
ダンジョン&ダンゲロス予告編
狂頭の試練場 ロケット商会
ダンゲロス4コマ 稲枝ケイジ

目次

目次

- 1 表紙 (稲枝ケイジ)
- 2 目次
- 3 ダンゲロスとは
- 4 絶対に知っておきたい魔人10選「山乃端一人」
- 5 「魁!!ダンゲロス」インタビュー
- 6 大食いは愛。あるいは、(ろれるり)
- 7 一刀両断、色を知る季節 (架神恭介)
- 8 ダンジョン&ダンゲロス予告編
- 9 狂頭の試練場 (ロケット商会)
- 10 ダンゲロス4コマ (稲枝ケイジ)



●山乃端一人

【本名】 山乃端 一人

【二つ名】 逢魔刻（クライベイビークライ）

【キャラクター説明】 12匹の《獄魔（デミゴッド）》が封印された山乃端家の「銀時計」を代々受け継ぐ黒髪の少女。

12匹のデミゴッドを集めるために“魔”の現れる地を転々と旅する……。

【特殊能力】 銀時計から、現在の時刻に応じた《獄魔（デミゴッド）》を解放し、召喚する。召喚するデミゴッドは完全に現在の時刻によって決められ、召喚者である一人の意志で決定することはできない。

たとえば、1時（と13時）に召喚されるのは《1—漆黒の人形（エヴォン・ドールズ）》。

3時（と15時）に召喚されるのは《III－血塗れの侵入者（ブラッディ・ハッカー）》。

初出は「二つ名ダンゲロス」。このキャンペーンは提示されたお題に沿って、参加者が各自中二力の高い（＝できるだけ痛々しい）キャラクター名・キャラ設定・特殊能力を考えて、GKがそれを朗読しつつ採点するという狂気の如き催しであったが、お題「一の入った名前」で最優秀を取ったキャラクター（というかネーミングが）「山乃端一人」である。その後、二つ名メーカー（<http://pha22.net/name2/>）により、「逢魔刻（クライベイビークライ）」という二つ名が与えられ、この名前と二つ名を元に40名超の参加者が各自痛々しい設定と能力を考えた結果、もっとも痛々しいと判断されたのが、「電子戯画“プラズマチルドレン”のもちお」氏による上記の設定であった。なので、上の設定は数ある痛々しい設定のなかの一つに過ぎず、山乃端一人の公的な設定というわけではない。

むしろより一般に認識されているのは、彼女が「死ぬことによりダンゲロス・ハルマゲドンを引き起こす死亡カウンター能力者」という設定である。これは「二つ名ダンゲロス」の後に行われた本戦「ダンゲロスFU2」のストーリーにおいて、彼女が何者かに殺されることがきっかけで疑心暗鬼が生まれハルマゲドンが起きるという重要人物として設定されたことに起因する。またFU2のラジオにてGKは「山乃端一人は死亡カウンターでハルマゲドンを開催させる能力を持つ」という設定を明かした。このため、以降のキャンペーンでもたびたびNPCとして（主にストーリー欄に）登場しており、「ダンゲロス禅&50」「第八次ダンゲロス・ハルマゲドン」「魁！ダンゲロス」などに彼女の姿が見られる。だが、「第八次～」における扱いは、

そして、*社会の流れ、人々の思惑、世界の危機とは全く関係なく山乃端一人が殺害され、戦いが始まった。*

といったものであり、「彼女が死ぬことでハルマゲドンが引き起こされる」のか、「ハルマゲドンが起こったら何がなんだか分からないが彼女が死ぬ」のか、よく分からない状況に移行しつつある。

本文：架神恭介（<http://www.pixiv.net/member.php?id=1149979>）

挿絵：ε（<http://jbbs.livedoor.jp/bbs/read.cgi/game/39801/1260064613/756>）

挿絵：今日知ろう（<http://www.pixiv.net/member.php?id=198683>）

「魁!!ダンゲロス」インタビュー

従来の1名～4名程度で行われていたGK業務を十数名での分業体制へと変更し、また、シークレット制度に変わる覆面制度などを導入した新キャンペーン「魁!!ダンゲロス」が始まった。増え続けるプレイヤー数と、それに伴い増大するGK負担に関して、独自の突破口を模索する今回のメインGK、ヌガー氏に「魁!!ダンゲロス」の分業制に関してインタビューを行い、氏の今後のビジョンを伺ってみた。（インタビュアー：架神恭介）

【資料】

・今回のGK陣は11名で構成され、計算においては3チームに分かれての分担作業となっている。ただし、計算以外のシステム面などに関しては各々が別の役割を持っていることもある。



架神恭介: ヌガーさんに、まず、お尋ねしたいのですが、今回の「魁!!ダンゲロス」を開催された主な目的は分業制の実践ということによろしいのでしょうか？

ヌガー: それは主目的の一つですね。これまででもGKの負担が問題視されていましたが、小説発売後は更に人口が増えると考えられていましたので、それに対応するシステムを作らなければいけないと思っていました。（注：ダンゲロスプレイヤーの人口増加と、それに伴うGK（ゲームキーパー/審判役）の作業負担の増大は、ダンゲロス開始以来の課題点であり、フィーリング計算や自重システムなど、これまで様々な解決法が提案、導入されてきた）

架神恭介: 分業制の狙いとしてはGKの作業量の分散と、他には？たとえばGK未経験者の人を多く誘ってGK予備軍を作るなどの狙いもあったんですかね？

ヌガー: それはありますね。他にもメインGKの役割を従来のものと変えようとする狙いがありますね。

架神恭介: といいますと。

ヌガー: 元々メインGK以外のサブGKはあくまで補助者的な意味合いだったと思うんです。これまでではプレイヤーとのメールのやり取り、計算、それからいろんな場面での判断など、主にメインGKがやっていたので今回はメインGKの仕事を判断と指揮に特化させようと試みています。

架神恭介: ヌガーさんの的には、今後のダンゲロスのイメージは、多くのプレイヤーを、多くの計算

者で処理し、最終的なバランス調整とコンセプトに関してメインGKが責任を負う、という形をイメージしてらっしゃるのでしょうか？

ヌガー: まさにそういうイメージです。そのために今回は計算過程には殆ど立ち入らないようにしました。

架神恭介: 今後プレイヤーがさらに増加していった場合の一つのアンサーを目指してるわけですね。今回のチャレンジにはかなり実験的要素がある、と。では、まだ進行中ではありますが、現在の手応えとしてこのアイデアの見通しはいかがですか？ 狙い通り？ それとも思わぬ問題点などありましたか？

ヌガー: メインGKとしては、目論見通り負担が軽減されています (笑)

架神恭介: (笑)

ヌガー: ただしそれを支えてくれている他のGKチームの人達はそのしわ寄せを受けているのかどうか、まだ何も聞いていないので後からなんとと言われるか怯えています (笑)

架神恭介: 以前にヌガーさんがメインGKを務めたキャンペーン「ダンゲロス武芸帳」などと比べて、負担は体感的にはどのくらいですか？ 武芸帳を100%とすると。

ヌガー: いつもルール作成などはむしろ楽しんでやっていたので、その辺は負担に思わなかったのですが、今回は他のGKたちにも意見を出してもらってみんなで作るという形にしたので、それを取りまとめるという新しい負担が増えたところがありますね。ただ、計算に関しては10%とか20%程度に減ったんじゃないでしょうか。ほとんど何もしてないので。

架神恭介: 作業自体は軽減されたけど、従来とは異なるセンスが必要になるというか、人によっては作業量が多くても一人の方が楽、ということもありうるシステム……ってことですかね？

ヌガー: そうなると思います。GKに最も必要な素養はセンスだと常々思っているのですが、質がまるっきり変わってくるでしょう。

架神恭介: 「質の変化」という点を詳しくいいですか？

ヌガー: 分業制をやるには管理職としてのスキルが求められると思うんです。今流行のドラッカーではないですが、プレイヤーを顧客、GKチームをスタッフと考えて、どちらにも満足してもらいながらクオリティを高めるために全体を管理する、それが理想のメインGKだと思いながらやって来ました。自分がそれを出来ているかは別ですけどね。

架神恭介: 今までの質との違いという点では？

ヌガー: そうですね。これまでは自分がすべての仕事をこなすわけですから、自分の能力が高ければできるし、問題が起きても自分のせいですが、分業制になると全てに目を通すことは土台不可能ですから。自分が関わってなくてもうまくいくようにシステムを作って任せないと、後からバランス調整の仕事が増えて、むしろ作業量が増えてしまうわけです。今回は優秀なスタッフを大勢揃えたので、うまく行ったのはある意味必然ですが、次回以降もそうなるとは限りませんしね。

架神恭介: 「自分が関わってなくてもうまくいくシステム作り」という点に力点が変わった感じですか。ある意味、「メインGKが楽をする」を達成できることが、このシステムだと優れたメインGKの証明になりそうですね (笑)

ヌガー: まさにその通りです。ですから10%20%の仕事をしてしまったのはある意味で反省点ですね。

架神恭介: 「自分が関わってなくてもうまくいくシステム」という点ですが、これはヌガーさんは色々考えて実践されてると思いますが、たとえば後続のGKが分業制を実践しようとした際に、今回のノウハウやマニュアルを伝えることができる類のものなののでしょうか？ つまり、その「必要とされるセンス」は知識的に継承できるものですか？ もしくはそのトレーニング的な意味合いもあって計算者を増やしている？

ヌガー: いくつかのことは言語化できるとは思いますけど、やりすぎると先程のドラッカーではないですが、ビジネス書や自己啓発のようになってしまいますからね。どうすればいいかはこれから考えないといけないところです。

架神恭介: なるほど、そこは手探りな部分なんですね。では、ヌガーさんに管理されている(笑)側のDTさんやεさんは、今回のシステムを今のところどのように感じておられますでしょうか？ まずお二人の役割から教えてもらえますか？

ε: はい、設定担当、計算補助、メールでのやり取りをしていましたεです。陣営分け後は、SS・イラストの採点も担当させていただいています。

DT: 主に計算者補助を行っておりましたDTです。転校生周りのシステムも担当しております。

架神恭介: 今回何チームあるんですか？ おふたりともメインの計算者では、ない？

ε: 3名ずつで3チームですね。私とDTさんはメイン計算者ではないです。

架神恭介: 部外者からするとこの点が気になっているんですが、チーム間のコミュニケーション、さらにメインGKとのコミュニケーションは円滑に行われているのでしょうか？ チームの中でのコミュニケーションに関しては従来のGK方式とあまり変わらないんですかね？

ε: そうですね。基本的には掲示板で相談して、急ぐ場合はスカイプでの話し合い、という形で行っていました。

DT: 私はなにぶんGK作業が初めてなもので従来がどうなのかを存じませんが、基本的にメイン計算者が計算したものを残り二人を交えて検討する、といった形です。

架神恭介: 今回メイン計算者はどなたなんですか？

ε: メイン計算者は、雷真さん、ソリさん、ルフトライテルさんですね。私とDTさんは雷真さんのチームでした。

架神恭介: メイン計算者に比べるとお二人の負担は少ない？

ε: 負担はだいぶ少なかったですね。ほとんどのキャラクターは雷真さんが計算式を立ててくれて、それに対して私とDTさんが意見していく、という形だったので。総じて分業制は非常に楽でした。今回、自分のチームでは23名のキャラクターの計算、プレイヤーとのやり取りをしたのですが、本来であればこの3倍の量を捌かなければいけなかったのだと思うとゾッとしますね。

架神恭介: メインGKとのコミュニケーションに関してはどうですか。僕にはいまいち分業制の全容が見えてないんですけど、どういう時にメインGKとコミュニケーションする必要があったのでしょうか。また、そこでチーム間の知識量の差や認識の差が出て問題になるなどの問題はありましたか？

ε: うーんと、まずこちらのチームでプレイヤーと何度かメールのやり取りをして、それでプレ

イヤーの納得のいく能力の仕様になったら清書して、メインGKに確認してもらって問題がなければ能力確定となります。メインGKから、「いや、ここの仕様はおかしい！」というように待ったがでたら、プレイヤーに再度メールをして修正する形になります。

架神恭介: じゃあGKはもう完全に最終チェックだけ？

ε: 計算に関しては、最終案をヌガーさんにみてもらい、基本的にヌガーさんが計算途中で意見を出してくるということはなかったですね。ただ、こちらの方でどういう処理にした方が良いか、ガイドライン外の制約に関してはどの程度の倍率がよいのか、などで判断に困った時などはGK全員が共有している掲示板でヌガーさんや他の計算者に意見を求めたこともあります。

架神恭介: なるほど、ガイドライン外の処理にはある程度、チーム間の認識を共通させる必要がありますもんね

ε: 知識量や認識の差は、チームごとにかなり合ったような気がします。ガイドラインに関しても、一通り目を通したつもりでもいろいろと仕様に関して見落としなどもありましたし。そういったミスを指摘してもらう意味でも、メインGKによる最終チェックは助かりました。

架神恭介: GKの最終チェックは各チームの認識の差を最終的に調整する意味もあったんですね。単なる二重チェックではなくて。

ε: 一方のチームではこの制約にこの倍率を付けているのに、もう一方のチームでは全然違う倍率をつけていた、ということになると、プレイヤーからの苦情もきそうですからね。もちろん、似たような効果や制約でも、チームごとに若干違う数値になってしまうことは避けられないとは思いますが、あまりにも他のキャラと大きく数字が異なっていたらヌガーさんが待ったをかけてくれましたね。

架神恭介: あと分業制に関してはやはりこの点が気になってしまうんですが、コンセプト的な部分をメインGKが担当し、実際の計算などの処理を他の人に任せるという方法になると、それなら実際の処理をしてる人たちは自分がメインGKをやった方が楽で楽しいんじゃないか、的な考えも出てくるかと思うんですが、そこは実際はどうだったんでしょうか？ あとヌガーさんはそれに対し、どういう解決法を考えてたんでしょうか？ 僕は今までも「サブGKって何のために自分からやってくれてるんだらう？」的なところは正直あったんですが（笑）

DT: ルールやら設定についてもGK全員で相談しながら決めていった部分もありますよ。もちろんヌガーさんの原案が叩き台としてありましたが、基本的に皆で相談しつつ作り上げた要素も多かった気がしますね。

架神恭介: 心むふむ、サブGKは今までのようなお手伝い的な感じではなく、むしろ全員がメインGK的な権利を持ちつつも役割が違う、というニュアンスですか？

ヌガー: ルール、設定、転校生などを自作するというメインGKの特権を他のGKに一部開放したんですよ。美味しいところを自分だけで独占するわけには行きませんからね。

ヌガー: だから私の考えた転校生はコンペで落選してしまいました（笑）

架神恭介: 転校生コンペ（笑）

ε: ああ、そういう理由でヌガーさんはあんまり手を出さなかったんですね。なんで自分のキャンペーンなのに自分で設定考えなかったんだらうと思ってましたよ（笑）メインGKとしては一番作りたところなのに（笑）

ヌガー: その辺から加わってもらうことで自覚を高めて欲しいという意味もありましたけどね。

架神恭介: ルールはあなた、設定はあなた、転校生はあなたに任せますからどうぞ、じゃなくて、みんなでアイデアを出しあって企画会議的な感じで煮詰めていったということでしょうか。

DT: そんな感じですね。各部門に担当者はいましたけど、関係する会議内容をまとめて形にするのが主な仕事といった感じで。

架神恭介: これまでのGK業務とは全く異なる形態ですね。面白い試みだと思います。では、まだキャンペーンも途中ではありますが、最後にお一人ずつコメントをお願いいたします。

ε: GK業務は初めてで、至らないところもたくさんあったと思うのですが、プレイヤーのみなさんに楽しんでプレイしていただければ幸いです。それだけのご褒美。

DT: GK未経験の皆さんには、是非GKまたはサブGKをやって頂きたいですね。見えてくるものが変わると思います。

ヌガー: 優秀なGKチームのおかげで第一の山は越えられました。前回の禅&50ではこの後の山でコケたので（注：キャラの仕様とGKの理解の食い違いに関しての問題）、今回はそれも超えられることを祈るばかりです。

プレイヤー数増加に対し、ヌガー氏の発案したGK数増加と分業制の導入はアンサーの一つとなるのであろうか？ また、分業制に伴い生ずる(?)問題点は「魁!!ダンゲロス」のキャンペーン終了時にまた考慮されることとなるであろう。本インタビューが分業制システムを評価する際の一助となれば幸いである。

編集：架神恭介 (<http://www.pixiv.net/member.php?id=1149979>)

希望崎学園二年の鯨野馬左衛門（くじらのうまざえもん）は、女子生徒に好かれていることでは、学園内でも五本の指に入る。

とはいっても、それは異性としてモテている、ということではぜんぜんない。彼ははっきり言って不細工だったし、なにより顔が多少ましでも、その人間ばなれした超肥満体——三百キロとも四百キロとも言われている——であってみれば、よほど特殊な性癖をもっている女性でないかぎり、なかなか好かれにくかったにちがいない。

彼の人気の秘密は、その魔人としての能力『ポリバケツ』にあった。

『ポリバケツ』とは、簡単に言ってしまうと、契約者が食べたものの一部を自分の胃に転送する能力である。

これが、「おいしいものは食べたいけど太るのはイヤ」を基本原理とする女子高生たちにとって、どれだけすばらしい能力であるかは言うまでもないだろう。馬左衛門と契約さえしておけば、ケーキやあんみつ、ラーメンや焼肉を存分に食べても、ほとんどスタイルがかわらない。あるいは、うまく活用しさえすれば、ダイエットすることすら可能なのだ。この能力ゆえに、馬左衛門は、魔人からも一般生徒からも、さらに女性教員からも重宝されていた。

魔人嫌いのある女子生徒が、「魔人なんて、どうせみんな口くでもない能力の持ち主ばかりかと思っていたけど、馬左衛門君だけは別ね」と言ったらしいが、それは多くの女性たちの気持ちを代弁する一言でもあった。

当時の希望崎学園は、ひどい荒れ具合であり、番長グループの傍若無人ぶりは目に余るものがあったが、馬左衛門はその渦中であってまったくアンタッチャブルであり、安閑な地位を保証されていた。なぜなら、彼の能力はとても戦闘に役立つものとは思えなかったし、また、彼に危害を加えることは、学園内の女性の多くを敵にまわすことにちがいなかったからである。

そんなわけで、鯨野馬左衛門は、幸福だった。平和で、女の子に人気があって、さらに彼はのちに述べるような事情で、女性から十分に官能的な快楽を享受してすらいったのだった。

さて、ここで能力『ポリバケツ』について、少し詳しく説明しておく必要があるだろう。

この能力が、「契約者が食べたものの一部を自らの胃に転送する」ものであることは前述したとおりである。

相手と「いつからいつまで」（最大二十四時間）と時間で契約し、その最中に契約者が飲食したもののうち、最大九〇パーセントまでを引き受ける。その割合に関しては、契約時に決定する。契約の相手は実は複数も可能なのだが、馬左衛門は「一度にはひとりしかダメなんだ。ごめんな」と断っている。

また、契約者が飲食をしているときの感覚は、飲食に関係するものに限って馬左衛門にもダイレクトに伝わる。もちろん、その感覚は契約者も味わっている（そうでないと、わざわざ面倒な契約をしてケーキやラーメンを食べる意味がない）。馬左衛門が、一度にひとりしか契約しないのは、さすがに大人数との同時契約をこなすと自分の胃袋が持たなくなってしまう危険性が

ある、ということもあるが、そのもうひとつの理由と言うのが、同時に複数の味覚が伝わってくることによって、組み合わせによっては地獄のような経験をするハメになるからだ。

そして、彼が「女性からも十分に官能的な快楽を享受している」というのも、この味覚同期能力によるものだった。

「異性と食事をともにする」という行為は、生理的・心理的にいっても、セックスの疑似体験である、という説がある。本能を満たし、快楽を得ることを共有する行為だからだ。馬左衛門の能力は、その「食事をともにする」快感を何十倍にも激甚にしたものと言っていいだろう。

たとえば女子高生が、タイヤキにかぶりつくとする。そのかぶりついたときの歯ごたえ。あんなこの熱さが口腔に直接触れるのを阻止し、空気を入れるためにする「ほふほふ」。それが落ちていくと、しっかりとした存在感を持ちながらもなめらかなあんの粒が舌の上に刺激をあたえ、それを口の中ですりつぶして、しびれるような甘さを脳に届ける――。

あるいは、ラーメンをすするときの、ほほのすぼまる感じと、一気に奔流してくる麺がのどを力強くくすぐりながら落ちていく感覚――。

あるいは、いい具合に火が通ったカルビの脂が、じゅわっと広がって口の中を満たす幸福感――。

遠く離れたところで、そんな飲食の快楽をたったふたりだけで、同時に同じように味わっている。そして、おそらくは自分と同じように唾液を分泌しているにちがいない。そう考えると、馬左衛門は、いつでも絶頂に達した。

だから、童貞の高校生のくせに、馬左衛門はいまではもうほとんどセックスというものに興味がない。

自分が、この能力で味わっている快楽の同時体験に比べれば、あれは他人の体を使いあったオナニーとしか思えない。彼は、「セックス...セックス.....セックス.....！！」と血眼になっている同級生たちが、ほとんど哀れになってくるのだった。

しかし、そんな彼にも、いわゆる恋心というものが無いわけではなかった。

それはただ、失恋に終わった初恋を引きずっているだけのものかもしれないが、いまでも彼女のことを思い出すと、胸が切なくなるのは本当だった。

彼女の名前は、白岡冬子。中学校でのクラスメートで、魔人ではなく一般人。そして、現在、大食い女王の名をほしいままにしている女子高生フードファイターだ。

魔人に覚醒する前の馬左衛門と冬子は、目立中学校で一、二をあらそう大食いの生徒だった。「馬左衛門と冬子のどっちがすごいか」は、中学校でもっとも熱い議論の題材だったし、実際にふたりとも、お互いをライバル視していた。

けれども、馬左衛門は、冬子をただライバルとだけ思っていたわけではなかった。目立中学の大部分の男子生徒と同じく、ひそかに冬子に憧れていたのだ。

それも無理はない。白岡冬子は、はっとするような美少女だった。長い髪と、抜けるような白い肌。美しく切れ長の澄んだ瞳。これで恋に落ちない同級生がいたらどうかしている、というほどの美しさだった。

馬左衛門は、自分の思いが片思いだとは知っていたし、また、彼女が異性としてではないけれ

ども、自分に一目を置いてくれていることも知っていた。だから、思いを打ち明けることもなく、ライバルという特別な関係であることに満足していた。

けれども、そのような平穏で幸福な時は、中学三年生の秋に終わった。

暑さもややおさまってきた、ある秋の夕べ、馬左衛門は自宅でテレビを眺めていた。

番組は、日本全国の超大盛店を紹介するというもので、タレントが取材に行っては驚いてみせるというものだった。

画面には、その店のスペシャルカツ丼、洗面器のような丼に一升はあろうかという飯が盛りつけられ、さらにその上に厚切りトンカツが十数枚乗っているというシロモノが映し出されていた。

タレントは無謀にもそのカツ丼に挑戦し、そして、早々に音をあげるのだった。

「うわー、もう限界です。それにしても、親爺さん、この丼、いままで完食した人っていますか？」「いやー、いないねえ。注文はけっこう来るんだけどねえ。だから、」

「毎日のように、むちゃくちゃ残飯が出て困るよ」

馬左衛門は、このセリフを聞いて（夕飯がまだだったこともあって）、本気でこう思った。

（残飯？ 残飯にするくらいだったら、オレにくれよ！）

その瞬間、彼は『ポリバケツ』を能力として持つ魔人に変貌した。

魔人となった馬左衛門は、その能力のほかに胃袋もはるかに強くなった。もはや、白岡冬子は敵ではなかった。冬子も、彼をライバルとは思わなくなった。それどころか、自分の大食いにひそかな誇りを抱いていた彼女は、馬左衛門に嫉妬し、彼を憎みだした。

馬左衛門が魔人になったこともほどなく周りに知られるようになった。実は、馬左衛門は、大食いで彼に負けて意気消沈している冬子を慰めようとして自分が魔人に覚醒したことを告白したのだ。それはもしかすると、彼なりの愛の告白であったのかもしれない。けれども、結果として、冬子はますます強く彼を憎み、また、彼が魔人になったことを周囲に広めた。

野馬左衛門は、魔人として生きることを余儀なくされた。進学先も希望崎学園を選んだ。

一方、白岡冬子の屈辱は、馬左衛門の青春を狂わせただけでは晴れなかった。人間の身で、いつかあいつにも負けない大食いになろう。この世界の頂点に立とう。彼女はそう誓い、大食いの鬼となるべく、常人離れした努力をつみはじめた。

（わたしは、わたしの存在証明を見つけた。大食いで、勝つ。誰よりも、食べる！）

その結果、彼女は、高校一年にして大食い界の四大タイトル完全制覇を成し遂げ、文字通り、この世界に君臨するフードファイターとなったのだった。おまけに、フードファイターとしての実力向上にもかかわらず、まったく身体も膨らむこともなかったし崩れることもなかった。それどころか、高校生となって、その清楚な美貌にはさらに大人めいた色気が付け加わっていた。彼女は、いまでは並のアイドルや女優などを寄せ付けないスーパースターだった。馬左衛門の手の届くような存在では、もはやなかった。

もう十分にも暑いにもかかわらず、冬子は、帽子にコートさらには手袋、といういでたちだった。加えるにサングラスとマスクをしているところを見ると、これは人に自分が白岡冬子だということを知られたくないがための用心にちがいない。

それにしても、突然の訪問客が、あの冬子だとは……。

馬左衛門は、コートを脱ぎマスクとサングラスを外しながら、無沙汰をわびる冬子——いつもテレビで見ている以上の、そして、馬左衛門の記憶に残っている以上の美しさだった——の姿を見て、これが現実の出来事のように思えず、思わず口が聞けなかった。

「……なに、鯨野くん、ひさしぶりに会った中学校のクラスメートに挨拶もしてくれないの？」

ちょっとスネたふりをして、にっこり微笑む冬子を見て、馬左衛門は、やはり自分は彼女に惚れているのだ、といことを否応もなく実感した。

「あ。あ。いや……。うん。いきなりじゃないか。少しびっくりしたんだよ。ど、どうしたんだよ急に。何か用かよ」

「何か用って……。友達を訪ねるのに、用がなきゃ来ちゃだめなの？ 鯨野くんって、けっこう冷たいのね」

「あ。あ。いや……。うん。もちろんそんなことはないよ。でも、これまで全然連絡とかもなかったし……」

「まあ、でも実は、今日はね、鯨野くんにお願いがあってきたの」

それにしても、と冬子は思う。なんてむちゃくちゃなデブになったのかしら、この不細工は！けれども、この尋常じゃない肥満体を見れば、あの「能力」の話にも、さらに信憑性が増すというものだから悪いことではない……。

「なんだよ」わざとぶっきらぼうに答える馬左衛門。

「うん。これを頼むのは、すごくはずかしいんだけど……。あの、わたしがいまフードファイターとして仕事をしているのは知っているでしょ」冬子はいよいよ本題を切り出す。

「うん。まあ、ときどきテレビで見るからね」

もちろん、「ときどき」どころではない。馬左衛門は、彼女が出る番組をひとつ残らずリアルタイムで観て、さらには録画したものを十回ずつは見返している。

「それでね、わたし、その仕事でけっこういいところまで行ってるんだ。いくつかタイトルもったし、たぶん、いまのわたしなら、魔人の鯨野くんと勝負してもけっこう戦えるんじゃないかと思ってるくらい」

それは、馬左衛門も思っていることだった。魔人になりたての頃に、一瞬、圧倒的な力量差がついたものの、馬左衛門の能力自体は大食いに対してどうこうの効果を発揮するものではない。ただ、魔人が能力の覚醒とともに大抵は強靱な肉体を手に入れるように、彼は胃袋ほかの消化器官が強化されたにすぎない。天性の素質に、血のにじみゲロを吐くような努力を重ねたいまの冬子であってみれば、自分と互角の量を食べることができてもおかしくはない。実際、タイトル戦をテレビでみているかぎりでは、冬子と戦って勝てる保証はない、と馬左衛門は判断している。ただし、魔人は一般の人間が参加する競技からは完全に締め出されているので、彼女と戦うということ自体がまったくありえないことなのだが……。

「でも、実は、いまもうひとりすごい子が出てきてるの。正直言って、わたし、あの子に勝てる

とは思えない。でも、でも、わたし……どうしても勝ちたいのよ！」

白岡冬子は、鯨野馬左衛門の魔人能力を使って、戦うつもりなのだ。

冬子の言った「あの子」とは誰か、馬左衛門にもすぐにわかった。

現在、中学二年生。彗星のごとくあらわれた天才大食い少女、大曾根多可子である。

彼女は真の天才だった。デビューしたのは去年の末だが、あっという間に頭角をあらわした。今年の春には四大タイトルのひとつ「名食戦」で、あれよあれよという間に予選を勝ち抜き、決勝ではなんと冬子を抑えて優勝したのであった。冬子の持っていた史上最年少の記録を塗り替えての快挙である。

決勝は、大差だった。その上、優勝のインタビューを受けてうるときにおなかが「ぐー」と鳴ったという噂までがあった。

さらに、多可子は、冬子とはまたちがったタイプの美少女だった。髪はショートカットで、目鼻だちがとにかく愛くるしい。ときどき見せる少女らしい笑顔と、なんでもおいしそうに食べるその姿は、あっという間にファンを増やし、冬子のファンからも乗り換えるものが続々とでてきている。

冬子にとって、これこそ人生最大の屈辱だった。これと比べれば、中学のとき馬左衛門に差をつけられたことなど何ほどのことがあるだろう。努力では埋めようのない、圧倒的な才能の差。生まれ持ったものの違い。容姿の点で、明らかに自分に分があれば、まだしもなぐさめになったかもしれない。しかし、多可子の人気は、冬子にそのような逃げ場を与えなかった。

冬子の誇りは、ねじ曲がってしまった。不正——それも自分が憎んでいた人間に頭を下げてまでの——を選んでまで、多可子に勝ち、そうすることによってまで、自らのプライドを保とうと思うまでに。

馬左衛門は、協力することを約束した。

考えた末の決断ではない。不正であるかどうかなどは、そもそも考慮の外だった。童貞らしい純情さを持つ馬左衛門としては、惚れた女に懇願されては——もちろん、彼とて、冬子が自分に好意を持っていると思っているわけではなかったが——それを無下に断るなどということはありませんでした。

それにもうひとつ、彼は、この協力によって、冬子とあの官能的な関係を結べることを思っほとんど恍惚としていたのであった。

(彼女が咀嚼するようにおれも咀嚼する)

(彼女が味わうようにおれも味わう)

(彼女が食べたものがおれの身体に移される)

(彼女といっしょに戦える)

それだけで、十分だった。

契約は交わされた。

転送の割合は、五〇パーセント。ふたりの大食い力を同等だと仮定すれば、戦いにおいて最大

のパフォーマンスが発揮できる割合である。もっとも、さすがの大曾根多可子といえども、現王者の白岡冬子と、魔人強化された胃袋を持つ、鯨野馬左衛門のふたりを相手にしては、ここまで徹底しなくとも、勝ち目のあろうはずがない。

冬子は、この契約がなったことで、自らの勝利を確信した。

3

「食王戦」の決勝は、例年どおりテレビで生中継される。決勝は、白岡冬子と大曾根多可子の一騎打ちとなった。下馬評は多可子勝ちの予想が圧倒的だった。春の「名食戦」での鮮烈なデビューには、それだけのものがあったのだ。

実は、番組プロデューサーも同じような危惧を抱いていた。多可子のワンサイドゲームになって、番組自体が途中で白けたものになるのではないだろうか。それに、このプロデューサーは、どちらかといえば、冬子のファンでもあった。

というわけで――、

「……さて、今日これから、世界最強の大食いが決定するわけですが、今回は、いつもとは趣向を変えたメニューを用意しました。大食いというのは、すべての食材に対して、愛をもってなくてはなりません。たとえ、それが、一般には食べにくいものだとしても。……決勝のメニューを発表します。スペシャル激辛カレーです！！」

プロデューサーは知っていた。冬子は辛いものを気にしないということ。そして、多可子は、辛いものはそんなに得意でないということ。

(うん。これでちょうど白熱した戦いになるんじゃないかな)

しかし、彼は知らなかった。鯨野馬左衛門が、辛い物を大の苦手としていることを――。

馬左衛門は、テレビの前で、顔面蒼白になった。

(激辛カレーだと！？)

辛いカレーなど、ここ何年も食べたことがない。希望崎の女性たちと「契約」するときも、辛いものだけは避けてくれるように言っている。まあ、辛いものを食べるために馬左衛門と契約しようとする女性はまだ多くはいなかったが。

しかし、彼はただちに覚悟を決めた。

(なに、どうってことはない)

(白岡といっしょに味わうカレーだ)

(彼女が戦いの場で苦しい思いをしているとき、おれもまた、苦しい思いができる。本望だ)

「それでは、制限時間は六〇分。より多く食べた方が優勝です！ 第五回食王戦、決勝戦、スタートです！」

テレビの画面では、司会者が景気よくスタートを宣言した。

冬子は、ゆったりとスプーンを手を取った。馬左衛門は、来るべき衝撃に備えて、ごくりと唾

を飲み込んだ。

それからの、数十分の馬左衛門が味わった味わいの強烈さは、なんと表現するのが適切だろうか。

恋する女性と感覚的に一体となった喜び。その女性に、徹底的な苦痛を与えられる嗜虐的な官能。その相手と一緒に戦い、勝利をめざすうれしさ。ふたりだけで、人に知られてはいけない秘密——不正——をわかちあう共犯者意識。それが混然一体となって、馬左衛門を支配する。

（うれしいよ白岡うれしいよ！いまおれたちはおなじものを味わっているよ！おまえがたべたものをいまおれもあじわっているよ！！！）

（ういいいい！！辛れええええええ！！っていかいてえ！！水水水水水水水水！）

（がんばれ白岡！おれもがんばるぜ！ふたりで勝利を勝ち取ろうぜ！おれたちふたりで戦えば無敵だぜ！がんばろうぜ白岡！！！）

（冬子……おれはうれしかった。この秘密は絶対にほかには明かせないよな。もうふたりはずっとずっと運命共同体だ……！）

まあ、こんなような感覚が激しく交差し、混然一体となって馬左衛門を揺さぶり続けていたのである。

「おかわりっ！」

冬子は快調に——快調すぎるくらいに——皿を重ねていた。カレーはたしかに辛い、なかなか旨かった。

中盤にさしかかったところで、多可子をかなりリードしている。さらに、冬子（+馬左衛門）の胃袋にはまだ余裕があるのに対して、多可子のペースは徐々に落ちはじめている。

「おかわりっ！」

冬子のコールが響き渡る。ついに五皿の差がついた。それでも、冬子は追撃の手を止めない。ちらりと隣を眺めやると、多可子のスプーンの動きが鈍りがちになっているのがわかる。そして、それはさらにテンポを落とし、ついに、止まった。

止まったまま動かない。

（これは……勝った！）

と、多可子の前のカレー皿（半分以上カレーが残っている）の上に、ぽたりと一粒の涙が落ちた。

（……もう、食べられない……）

目に一杯涙を浮かべて、多可子はそう思った。心がほとんど折れかけた。無理もない。彼女はまだ中学生なのだ。それも、負けたことのない天才が経験する、大舞台での初めての挫折。混乱した頭の中では、悲しいような悔しいようなヘンな気持ちがうずまいていた。

そんな多可子の様子を目の端でとらえながら、冬子はニタリと汚い笑みを浮かべて思った。（あはっ！ ちょっとくらい才能があるからっていい気になっていたからよ。いい気味だわ～。じゃあ、さらにスパートかけて、あのガキに決定的な敗北感を味あわせてやりますか！）

「おかわりっ！」

差は、十皿に広がった。

(.....もう、食べられない.....)

と多可子は思う。

(このカレーも、もう残しちゃう.....)

(ごめんねカレーさん。あたし、食べるのは大好きだと思っていたのに、なんでも食べれると思っていたのに)

(もっともっと、食べたかった。どんなものでも残さず食べて、多可子ちゃんすごいねってほめられたかった)

(でも、もう入らないんだ。ああ、あたしの身体ってこんなにちっちゃかったんだ。もっと無限の大きさがあるものだと思っていたのに)

そのとき、唐突に多可子は魔人に覚醒した。自分の胃袋が無限の広がりを持つものとして「認識」された。

能力名は、『ブラックホール』。すべての有機物を好き嫌いなく食べ、無限に消化吸収し、そこから、自由自在に栄養素を取捨選択できる能力だ。そして、これは、「大食い自体にかかわる能力」だった。その意味で、いかに強靱であろうと、所詮は有限である冬子（+馬左衛門）の胃袋など、問題ではなくなった。

多可子は、もちろん、自分が魔人になったことがわかった。けれども、それを申告して戦いを終わらせる気はなかった。よく知られているように、覚醒したての魔人がおのれの力を制御することは非常に困難である。多可子は、その力を遺憾なく発揮し、目の前のカレーを猛然と食べた。

突如、カレーを猛然と食べた多可子を見て、冬子をはじめ、最後の力をふりしぼったただの悪あがきだと思った。しかし、それはとどまるところを知らない。三皿、五皿.....みるみるうちに冬子との差がつまんでいく。でも、それが何だというのだ。冬子は負けられない。不細工なクソ魔人の力を借りておきながら、負けることが許されるわけがない。

彼女自身の胃袋にも、やや底を感じるようになってはいたが、さらにペースをあげた。

その瞬間をテレビで観た馬左衛門は、魔人特有の感覚から、大曾根多可子が魔人に——それも大食いにかかわる能力を持つ魔人に——覚醒したことを瞬時に悟った。そして、それが彼と冬子の敗北を意味することも。

しかし、真に恐るべきは、敗北などではなかった。本当に恐ろしいのは、この期に及んでもペースをあげた冬子の心の折れなさであり、彼女の胃袋の容量だった。それは馬左衛門の胃袋よりも強いであろうことが、いまおぼろげに見えてきた。

馬左衛門は、激痛（もはや辛いという感じはマヒしていた）と快楽と歓喜の痺れの渦から、もうひとつ、さらに強烈な感覚がせりあがってくるのを感じていたのだ。

その感覚とは、——満腹感である。

(こ、これは……まずい。まずいぞ！)

冬子も限界に近付いてきた。

(なに……。なんなの……。あの娘……。わたしのお腹も……。もう……。いや！ でも、負けてらんないのよっ！！)

スプーンを止めない。止めたら終わってしまう。止めてはいけない。

(白岡……。もう止めてくれ。もう……。おれは、げ、限界だ)

馬左衛門は、テレビの前でひとり悶絶していた。空腹はつらい。しかし、満腹なのにさらに食べ物を詰め込むつらさもそれに劣らない。もっとも、満腹状態に食べ物を詰め込む、という行為には終わりがある。身体が拒否するからだ。本当に食えなくなったときにさらに食べるということは普通ならばできない。けれども、馬左衛門は自分自身で食べているわけではない。食べているのは、画面の向こう、声も願いも届かない白岡冬子だ。

彼女は、力を振り絞って、カレーを口に運ぶ。

馬左衛門の胃は、ついに限界に達して、自らの内容物を外に吐き出そうとする。

しかし、次々と送り込まれてくる冬子の食したカレーは、その内容物が外に出ようとするのをとどめつつ、さらに彼の胃の中に入り込んでくる。

この戦いがはじまってから、馬左衛門の思考はほとんど言葉にならない、強烈で混沌とした感覚そのものだったが、ここに至ってそれは、もはや完全に言語で表現できるものではなくなった。あえて、表現するとしたら、(うおっぷ！)とでもいうしかないであろうか。

(うおっぷ！) (うおっぷ！！) (うおっぷ！！！)

白目をむきながら、消化器官全体を蠕動させつつ、彼はもう冬子のことも思わなかった。

(うおっぷ！！！！)

という感情とも断末魔ともつかない感覚の迸りを炸裂させて、彼は、満腹死した。能力者の死により、能力『ポリバケツ』の契約も解除され、本契約によって転送された内容物は契約者に返還された。

同時刻、冬子は、九十九皿目のカレーを食べ終わり、百皿目をコールしようとしたところだった。しかし、「おかわり」を十分に発声することはかなわなかった。

「おがばびっ！！」と叫んで、白岡冬子は、秘孔を突かれたモヒカンザコのようにはじけ飛んだ。

半径十メートルにわたって、彼女の胃におさめられたカレーと、彼女自身がぐちゃぐちゃにまじりあってまき散らされた。

中継は切られ、怒号と悲鳴が飛び交う中で、百十皿目のカレーを食し終わった大曾根多可子は、そのとびちった半消化物のカレーと、さっきまで冬子であったものの混合物を延々と口にしながら食べていた。

エピローグ

大曾根多可子は、魔人であるため、大食い界を永久に追放されることになった。希望崎学園に進学してからの彼女の活躍については、長い話になるから、いまここで語るべきではない。

*

この番組をお茶の間で見ていた当時小学生の架神恭介は、「へー、人間って食いもん（カレー）で爆発するんだー！」と思った。

*

希望崎学園の女子生徒は、以降、少しだけ太り気味になった。

(完)

本文：ろれるり (<http://www.pixiv.net/member.php?id=2906503>)

一刀両断、色を知る季節 （架神恭介）

<あらすじ>七月のある日のこと。生徒会二年、女子剣道部主将、一刀両断（いとりたち）の口から、驚くべき言葉が飛び出していた。「わ、私……。え、えっち、したことある……。えっち……。しちゃった……。！」。ヤンデレ（？）少女、一刀両断の赤裸々な初体験が明らかにされる……。!? 【世界観】架神BOX版準拠



心底驚いた表情を見せた二人の後輩を前にして――。

むしろ、発言者の一刀両断（いとりたち）の方が、恥ずかしげに顔を赤らめていた。

二人の後輩は感慨深げに言う……。

「い、一刀両先輩って……。意外と進んでたんですね……」

「スイマセン……。私、センパイって、そういうの全然興味ない人かと思ってて……」

——希望崎学園武道場の横に併設された、女子剣道部部室内での一幕であった。

夏休みを前にした七月のある日。

授業が終わり、部室へとやってきた一刀両は、そこで先に着替えに入っていた一年生女子二人に会話を振られて、おずおずとその驚くべき内容を口にしたのであった。

その後輩二人は一刀両の顔をまじまじと見つめた後、互いに顔を見合わせて、改めて言った。

「でも、まさか先輩が……」

「もう"経験"してたなんて……」

そして、その眩きに、一刀両はまた一層頬を赤らめたのである。

話は、少し前に遡る——。

「でー。こないだもー、奇印先輩とえっちしたんだけどー」

「えー、てるこ、まだ奇印先輩と付き合ってるのー？ やめときなってるー。あの人、絶対アブナイよー」

一刀両が部室に入った時、後輩の女子二人はそんなことを言い合っていて、でも、そういったことにはほとんど不得手な彼女は、いつもどおり黙々と着替えなどしていたのだが……。

「せえーんばあーい」

その、てること呼ばれた女子の方が、じゃれつくように絡んできて、

「センパイはー。えっちとかー。したことあるんですかー？」

などとふざけてくるのだ。女子剣道部主将の一刀両断は練習中こそ厳しかったが、普段はむしろ優しい先輩だったし、それに、こちらの方面にはほとんど疎くて面白いくらいうぶなものだから、しばしばこうして後輩女子たちからかわられていたのである。だから、今も——、

「え、えっち……??」

と、一刀両は戸惑いながら、赤面するのである。

すると、待ってましたとばかりに、後輩二人はクスクスと笑い出す。それでも、一刀両も根が真面目なものだから、後輩の質問には答えなければいけないのかと律儀に思って、

「あ、あの……。その、えっち……ってのは、一体どういう……」

などと訊き返すのである。後輩二人はいよいよ面白そうな顔をする。

とはいえ、いかにこちらに疎い一刀両といえど、その言葉をまるで知らないわけではない。

「えっち」——、それが何かとてもいやらしいコトなのだという認識はあった。

「えー。だからー。ほらー。あれですよー。いわゆるー、セックス？」

「せ、せっくす——っ!!？」

一刀両はいよいよ真っ赤になってしまう。その反応に、後輩二人はププーッと吹き出してしまった。"遊んでいる"彼女たち二人にしてみれば、いまだにこんな化石のように純情な女子高生がいることがとても信じられないのだ。

一方、一刀両はといえば、今までその名こそ聞けど、具体的なイメージが全く浮かばなかった二つの単語、「えっち」と「せっくす」が結びついたことに戸惑いを隠せないでいた。

——そ、そうだったんだ……。えっちとせっくすって、同じ意味だったんだ……。

と、彼女は頭の中で反芻する。しかし、とはいえ、未だにその内容は彼女の知るところではない。中学生の時に保健体育の授業で一応教わったはずなのだが、体育教師は何とも神秘的で哲学的な説明をしたため、結局、一刀両には何のことだかさっぱり分からなかったのだ。後輩二人が自分の無知を笑っていることには薄々気付いていたが、一刀両自身も自分の無知は笑われても仕方ないなと諦め、そして、どうせなら恥はここで十分にかいてしまおう、と思って、彼女は勇気を振り絞り、

「その……せっくすってのは、どうやってするものなの……？」

尋ねてみた。すると、二人の後輩はまた顔を見合わせてクスクス笑って、

「えー。センパイ、そんなことも知らないんですかあー」

「きゃー、一刀両センパイ、マジかわいいんですけどおー」

などと散々もったいぶってから、

「いいですかー。センパイ。えっちはですねー。オトコノコの一。尖ったものがー。オンナノコの一。体の中に入ってくるものなんですヨー」

「で、二人ともすごく気持ちヨクなれるんですよおー」

意地悪そうに言うのである。

むろん、彼女たち二人は、こんな説明で一刀両が事を理解できるとは思っていない。「えっ、なにそれ!？」「全然分かんない!」「尖ったもの、ってナニ……??」などと慌てて尋ねてくるに違いない。そう思ってるのだ。二人は一刀両のそんな反応をワクワクしながら待ち受けていたのだが、しかし、一刀両から発せられた言葉は、実に驚くべきものだったのである。

彼女は、あ——ッ、と何かに気付いたような顔を浮かべて……、

「わ、私……。え、えっち、したことある……! えっち……しちゃった……!」

そして、一層、顔を真赤に染め上げたのであった。

だが、この言葉に真に啞然としていたのは、彼女の後輩二人の方であっただろう。

「い、一刀両先輩って……、意外と進んでたんですね……」

「スイマセン……。私、センパイって、そういうの全然興味ない人かと思ってて……」

と、ここで先の話に戻るのである——。

二人とも、先入観で先輩を見ていた己の不明を恥じるばかりであった。だが、まさか、毎日剣道と生徒会活動に明け暮れるばかりのこんな純情可憐な先輩が、いつの間にやら性の階段を一足飛びに駆け抜けていたなどと、二人には疑う由もなかったのだ。

しかし、その一刀両と言え、彼女も彼女で、

——わ、私……! も、もうせっくすしちゃってたんだ……。

と、困惑していたし、

——えっ! も、もしかして、私の方から先輩に、せっくすして欲しい、ってお願いしちゃったことになるのかな……。

恥らいに身を悶えさせていたのである。

まさか、"あれ"が世間で一般に言われている、はしたない行為の代表格「せっくす」だなんて、一刀両には思いもよらなかったのだ。でも、いま後輩二人の説明を聞く限りには、そう考える他なかったのである。

——オトコノコの硬い物がオンナノコの中に入って、二人とも気持ち良くなるって……。それって、つまり……、

「（刀で斬り合う……ってことだよな……）」

一刀両はそのようにセックスを理解したのであった。

「え、センパイ……。やっぱり初めての時は、痛かったですよね……」

後輩二人が確かめるように尋ねてくる。もしかして、主将は何か勘違いしているのではないかと疑ったのだ。しかし、それ自体は正解だったが、

「う、うん……。すごく、痛かった……」

などと一刀両が答えるので話はまたこんがらがる。

一刀両は二月前の白金翔一郎との斬り合いを思い出していた。

あの時、一刀両は白金に一撃で伸されて、肋骨を数本叩き折られていたのである。

卓抜した戦闘力を持つ一刀両断は、普段から己の力を抑えて試合を行ってきた。本気を出すと相手が死ぬのである。そのため、昔から「一度全力で戦ってみたい」「相手を殺すつもりで力を振るってみたい」と思っていたし、それが叶えば「すごく気持ちイイだろうな！」なんて思っていたのである。

その彼女の夢は先の五月に、男子剣道部主将、白金翔一郎との間で一応果たされた。流石に真剣での立ち合いこそ許されなかったものの、白金は彼女の望みを快諾してくれたのだ。それで一刀両は大好きな白金翔一郎に、全力で、殺す気で挑んだのだが、彼我の実力差は甚だしく、彼女は何もできぬうちに胴を打たれて肋骨を数本砕かれたのである。とはいえ、全力を出せた彼女は、その立ち合いの時とっても気持ち良かったのも事実で——、

「痛かったけど……。で、でも……す、すごく気持ちよかったし、私、また、やりたいな、って……」

そんなことを言うものだから、二人の後輩は動揺を隠せず、額を突き合わせて、

「ちょ、ちょっと……てるこ、どうすんのよ……。一刀両センパイ、思った以上にえろえろよ……！」

「どすけべね……」

などと、目の前の先輩に戦慄さえ覚えているのである。

彼女たちは恐る恐る訊いてみた。

「あの——……。センパイ、ちなみに、誰とやったんですか……。えっと、答えたくなかったら別にイイんですけど……」

「えっ……？ それは、もちろん白金先輩だけど……」

えーっ！！！！ と二人の女子が声を合わせて驚いた。

「（あれ？ 私、先輩にアバラ折られてからしばらく剣道部おやすみしてたのに……。え？ な

んで、みんな知らないの……??)」

と、ポカーンとしているのは一刀両だけである。

「し、知らなかった……。白金センパイが、まさか一刀両センパイと……」

「え、じゃあ、一刀両センパイって白金センパイと付き合ってたんですか!？」

「えっ——? ツ、ツキアウ——!!？」

一刀両はまたドギマギとする。

「(ど、どうしよう……。また知らない言葉が出てきた……。——えっと、ツキアウ……。? つきあう?? あっ! あ——……!)」

彼女はポンと手を叩くと、

「う、うん……。突き合ったこと、あるよ……!」

朗らかに言い放った。

「(突き合うっていうか、斬り合う、って感じだったけど……)」

ともかく、一刀両の中で「斬り合う」「えっち」「せっくす」「つきあう」の四単語が等号で結ばれた瞬間であった——。

そして、この言葉に、後輩たちはまた「はわわわ」と慌てている。

「わ、私……。てっきり、白金センパイは口舌院センパイと付き合ってるのかと思ってたけど……」

「私も……。えっと、センパイ……。白金センパイと口舌院センパイは付き合っていないんですか??」

「え、白金先輩と口舌院先輩が……。? えっと、そんなことは、ない、と思う……けど……」

一刀両が自信なさげに言う。「口舌院先輩が刀を使うなんて聞いたことないし、突き合っていないじゃないかなあ……」などと考えながら、「でも、口舌院先輩は学園最強魔人の一角だし……。もしかして刀も使えるのかしら……」とも思いつつ……。

一方、二人の後輩は納得のいかぬ顔でまた額を突き合わせると、

「ちょっと、てるこ……。もしかして、一刀両センパイ、ヤバイんじゃないの?」

「うん……。絶対、白金センパイに騙されてるよ……!」

「口舌院センパイと付き合ってるのに、一刀両センパイをつまみ食いしてたのね……!」

「ケダモノ……っ! 女の敵……っ!!!」

「これじゃ、センパイが他にどんな酷いことされてるか、分かんないよ」

そして、二人はまた一刀両に向かって、確かめるように訊いた。

「センパイ。えっちの時、白金センパイはちゃんとゴム付けてくれました?」

「へ……?」

「や、だから、ゴムですよ……。ゴム……」

「えっ? ゴム……??? ううん……。付けてないよ! 何も付けてないよ……」

——ゴムってなんだろう? 竹刀の先に付けるのかなあ……。安全対策??

そんな風に一刀両は考える。もともと、彼女は白金先輩を殺す気迫で挑むからには、先輩にも自分を殺す気に来て欲しい、そして、白金先輩にもとっても気持ち良くなって欲しい、と考えていたのである。白金もまた彼女と同じく全力を出して戦える立場にはなかったからだ。だから、

彼女は本当は真剣で立ち合いたかったくらいだし、竹刀の先にゴムを付けるなどするわけがない。

しかし、後輩二人は、この言葉に、また一段と憎悪を燃やして、

「ひどい！ 信じられない……！！」

「白金センパイ、紳士面してとんでもないケダモノね……！」

「センパイ！ もしかして、中に出されちゃったんですか……！？」

などと尋ねてくる。

一刀両は少し考えてから、

「え！？ う、うーん……。確かに、中ではかなり出ちゃったかも……」

二月前、彼女は肋骨を砕かれたわけだが、外出血こそなかったものの内出血はかなりのものがあった。

すると、二人の後輩は「ひっどーい！！！」と再び声を揃えて、瞳に怒りの炎を灯している。

「ちょっと、センパイ、他にどんなことされちゃったんですか……！」

「そんなケダモノが野放しになってるなんて！ もうセンパイ一人の問題じゃありません！ 詳しく教えて下さい！」

と詰め寄ってくる。

「えっと……。当時のことを、話せばイイのかな……？」

戸惑う一刀両に、後輩二人はコクコクと頷いた。

「えっと、あの時……。私……。前日の夜から寝付けなくて……。明日は白金先輩に、その、え、えっちして下さいって、言うんだと思ったら……。すごく、興奮しちゃって……。そういうの、私、初めてだから、ドキドキしちゃって……」

「セ、センパイの方から！ えっちして下さいって言ったんですか！？」

「う、うん……。早朝の、剣道場で……。白金先輩が朝練するの、知ってたから……」

「道場で……！ 道場でやっちゃったの！？」

「それで、お布団の中で……。明日は先輩と一緒に気持ち良くなるんだ、って思ったら、すごく体がぼかぼかしてきて……」

「はわわわ……」

「あわわわわ……」

「でも、ちょっとだけ寝れたから。起きて、浣腸して、勝負ふんどしに着替えて……」

「え！ ちょ、ちょっとタンマ……！ センパイ、浣腸ってなんスか！ 浣腸って……！」

「ひょっとしてそれも白金センパイの趣味なんスか！？」

「ええええ……っ！？ しゅ、趣味……？ よく、分かんないけど、でも、浣腸って、普通じゃないかな……？ えっち、の前には、浣腸しないと……。汚いことになっちゃうし……」

腹を斬られて斬り死にした者は、当然だが内臓をさらけ出して死に絶えることになる。しかし、その際に腸に内容物などあれば、それがはみ出てしまうこともありうる。そのようなみっともない姿を見せることは相手にとっても失礼なことであった。ゆえに兵法者は、古来より命がけの死闘の前には下剤などを飲み、腹腔の内容物を取り除いてから戦いに挑んだのである。

しかし、後輩二人はまた額を突き合わせて、

「……ちょっと。てるこ、どう思うよ、アンタ……」

「どうも何も……。そんなの、ねえ……」

「やっぱり、いきなり、お尻ってことかな……」

「ゴムも付けないわ、いきなり中出しするわ……。その上、初めてなのに一刀両センパイのお尻まで……」

「ホントひどすぎるよね……」

「でも、一刀両センパイ……。気持良かった、またやりたい……って……。センパイが望んでるなら、それでも……」

「う、ううん……！ だって、白金センパイには口舌院センパイだっているのよ！ きっと一刀両センパイが純情なのにつけ込んで、口舌院センパイとはできないマニアックなことを色々やっちゃったのよ！ サイテーのケダモノよ！！！」

「そ、そうよね……！ どうしようもない淫獣よね！」

と、いよいよ後輩二人が激昂し出したので、一刀両は慌てて、

「ちょ、ちょっと待って……！ 二人とも絶対何か勘違いしてる！ 全部、私が白金先輩にお願いしたんだから！ 先輩は何も悪くないから……！」

慌ててそう言ったのだが、しかし、後輩二人はまたしても額を突き合わせて、

「ぜ、全部、一刀両センパイの方から、ですって……」

「いきなり……、そんなハードなプレイを、自分から……」

「ウ、ウソよ！ 白金センパイに騙されてるのよ……！」

「そ、そうね！ セックスも知らなかった一刀両センパイが、そんなハードプレイをいきなりするわけないわ……！」

そして、彼女たちはもう一度一刀両に向きあって、

「センパイ！ さっき、『付き合ったことある』って言ってましたけど、今は付き合っていないんですか！？」

強い口調でそう尋ねてくる。一刀両は訳が分からないといった風に、「え、そりゃ、突き合っていないけど……」としどろもどろに答えた。

「（え。だって、いま、戦ってない、よ、ね……。この子たち何言ってるのかな……）」

呆け顔の一刀両には構わず、二人はまた詰め寄ってきて、

「それで！ それで、白金センパイは、またやりたい、って言ったら何て答えたんですか？」

「え……、何度でも相手してやる、って……」

「でも、今は付き合っていないんですよね！？」

「う、うん……。突き合っていないよ……」

すると、二人は急に深刻な表情を見せると、一刀両を諭すように、こう言い始めたのである。

「センパイ……。私たち、センパイのこと好きだから、あえて忠告します。センパイは、白金センパイに遊ばれてます……！」

「きっと、遊ぶだけ遊んで捨てる気なんです……！」

「え、ええ……っ！！？」

だが、後輩二人の言葉に、一刀両も戸惑いを隠せなかった。

実は、彼女もそれを懸念せずにはいられなかったのだ。

「（白金先輩は、遊びで……。私だけ、先輩を殺す気で……。本気で挑んだのに……。先輩は遊びで……）」

彼女はそう思い煩悶していた……。

そう、彼女の望む最良の状況とは、自分と白金の双方が相手を殺すつもりで、全力を出して白刃を交わすことだったのである。そうして、お互いとっても気持ち良くなりたい。そう思っていたのだ。然るに五月の戦いでは、白金は「今のお前ではまだ本気を出すことはできない」と言って、一刀両は一方的に打たれたのである。彼女は、自分ばかりが本気を出して気持ち良くなって、白金を気持ち良くできなかったことにずっと罪悪感を抱いていた。だから、早く白金先輩に全力を出してもらえるようになりたい、もっと強くなりたい、と、日々の猛練習に励んでいたのだが……。

一刀両はそのことを思い出し、白金への申し訳なさと、己の未熟を悔いる気持ちから、涙ながらに言った。

「確かに……。先輩はあの時、遊び気分だったかもしれない……。私は……。私は本気だったのに……！」

「やっぱり……」

「一刀両センパイ……かわいそう……」

二人の後輩も瞳に涙を溜めている。心底同情しているようだ。

一刀両もとうとう、ぐすん、ぐすんと咽びながら……、

「で、でも……。悪いのは、ぜんぶ私だから……。センパイが、本気になってくれるよう……。私が、ちゃんと釣り合うように、頑張らないと……」

「一刀両センパイ……！」

後輩たちは同時に一刀両の手を取った！

「センパイ！ そんなに自分を責めないで下さいっ！」

「悪いのは全部白金のアンポンタンです！ センパイがこんなに健気に尽くしてるのに……！
白金のアホ！ バカ！ 犬畜生！ 人間のクズ！」

女子二人は一刀両の手をさらに強く握って……、

「こんなドロドロした関係！ ダメです！ 不健全です！」

「センパイ！ 白金のアホが来たら、ハッキリ言って下さい！」

「遊びは嫌だ。本気で付き合ってほしい！ ってちゃんと言って下さい！」

「私、これ以上、可哀想な一刀両センパイを見てられないんです……！」

二人からは真っ直ぐな熱意が伝わってきた。だから、一刀両も、

「あ、ありがとう……。ぐすっ、ありがとう……。二人とも……ぐすん」
そう言いながら、二人の胸の中で泣いたのである。

だが、そうして女子三人が、何か訳の分からないことを言い合っているうちに、表の方から当の白金の声が聞こえてきた。それを耳ざとく聞き止めた後輩たちが、

「センパイ！ あのアホタレが来ましたよ！」

「センパイ！ ガツーン！と言ってやって下さい！」

「え……！ う、うん……！ がんばる……！ 私、がんばる……！！」

そう言って、一刀両は裸足で部室を飛び出していく。すると、表には今来たばかりの白金翔一郎。彼が、恋人の口舌院言葉と一緒にいた。

そして、白金は朗らかに一刀両に声を掛けた。

「よ！ 一刀両、今日も早いな！ 最近、調子はどうだ？ 胸の傷は……」

「先輩！ 私と……、私と本気で突き合ってください！！！」

「痛まな……へ？ はっ？ つ、つきあう?? え、えええ——」

「私と、本気で……！ 本気で、もう一度、せつくすして下さい……！」

「は！？ へっ！?? せ、せつく……?? え？ ちょ、もう一度?? オレと？ お前が……?? へっ……？ はっ……??」

「前みたいな遊びはもうイヤなんです！ 先輩とちゃんと突き合ってください……！ ちゃんとしたせつくすがしたいんです……！！！」

「えー？ はー?? えええええ——！??？」

と、白金翔一郎はこれまでに見たこともない愉快的な表情をこさえて唸っていたが、彼は、はたと気づき、恐る恐る、その視線を横へと向けて……、

「あ……。あの……。まず、一つ言っておきたいんだが……」

視線の先には——、

口舌院言葉がいた。

「ゴホン……。これ、たぶん、何かの誤解だから……。あの……。ことば……。いや、ことば、さん……。？ あのー。話せば、わかるかな、って思うん……です……け、ど……」

白金翔一郎の横にいた口舌院言葉は、いつもどおりニコニコと笑顔は崩さずに、しかし、目は恐ろしいほどに据わってキラキラと輝き、そして、

——ガシッ！

白金の後ろ襟を掴むと、

「しーろーがーねーくーん……。おはなしはーゆっくりーききますからねー。ゆっくり、ききますからねー」

ずるずると彼を引っ張っていずこかへと消えていった。その間、白金翔一郎の表情は恐怖に満ちたまま、石のように固まっていた……。

一方で、一刀両断は口舌院言葉の全身から発せられる凄まじい殺気に怯えながら、

——やっぱり、あの二人、突き合ってるのかもしれない……。

などと、明後日の感想に耽っていた……。

<終>

本文：架神恭介 (<http://www.pixiv.net/member.php?id=1149979>)

挿絵：稲枝ケイジ (<http://www.pixiv.net/member.php?id=50629>)



ダンジョン&ダンゲロスは一人用のダンジョンRPGボードゲームだ。ジャンルはハック&スラッシュ。ハック&スラッシュってのはアレだ。ダンジョンに潜ってモンスターをボコスカ殴って宝箱を開けて、わずかでもプラス修正の高いアイテムや、エンチャントのたくさん付いたマジックアイテムを手に入れてニヤニヤしたり、時にはモンスターに全滅させられて、苦労して手に入れたレアアイテムが露と消えて「あああああ……」ってなったりするアレだ。

ダンジョン&ダンゲロスには経験値はない。その代わりにプレイヤーは魔人ダスと呼ばれるカードダスのようなものから魔人をランダム召喚することでパーティーを強化する。本作に登場する魔人はC（コモン）、UC（アンコモン）、R（レア）、SR（スーパーレア）、転校生の順にレアリティを付けられており、レアリティの高い魔人ほど基本的には強いが、もちろんその分手に入りにくい。魔人ダスは1回100円の安価なものから、1回1000円の高価なものまであり、当然、高価な魔人ダスをプレイした方が良い魔人カードを得やすくなる。プレイヤーはダンジョンに潜り、経験値の代わりにお金を稼いで魔人ダスをプレイすることにより、パーティーの戦力強化を図るという仕組みだ。もちろん、各種の武器防具アイテム類も魔人の性能を底上げしてくれるだろう。

もちろん魔人たちはそれぞれ固有の特殊能力を有しており、役に立つものから、デメリットとしか思えないものまで様々だ。だが、一見使えない能力も他の魔人やアイテムと組み合わせることで思わぬ性能に化けることも……？ このあたりは各自試してみたい。だが、ダンジョンを徘徊するモンスターたちも恐ろしい特殊能力を備えていることがある。特に深層のモンスターたちはステータスも能力も強烈だ。最低でもUC以上、できればSRや転校生も組み入れたパーティーでなければ太刀打ちできないだろう。その分、深層は得られる金額もアイテムも魅力的なものとなっている。

ダンジョンの深層には圧倒的な戦力を持つシナリオボスが存在する。十分にパーティーと装備を整えてから挑むといいだろう。



ダンジョン



モンスター



主人公パーティー

※画像は開発中のものです。

ゲームはダンジョンパートと戦闘パートに分かれる。ダンジョンパートでは山から引いたダンジョンカードをMAPの上に並べていき、ダンジョンを構築しつつ進めていく。ダンジョンは地上に出るたびに初期化されるため、毎回異なる形のダンジョンを徘徊することとなる。探索中にはモンスターとの戦いが始まることもあるが、他にもNPCとの出会いもあれば、宝箱を見つけることもあるだろう。下り階段を見つければ下の階層に進むことができる。なお、1フロアに置けるダンジョンカードは最大36枚。1階層のダンジョンカードは25枚。行き止まりカードなどもあり、しばしば道は途中で閉ざされてしまうのだが、すべてのダンジョンカードを置くことに成功した場合、スペシャルイベントカードを置くことができる。スペシャルイベントではグレードの高い宝箱に出会うなど、とにかくプレイヤーにとって素晴らしいイベントが待っているだろう。頑張ってMAPを全て埋めてスペシャルイベントを目指して欲しい。大丈夫だ。ダンジョン&ダンゲロスにはプレイヤーの射幸心を刺激し、みなさんが欲張って無理をした挙句に全滅するよう細心の注意を払ってゲームメイクされている。



戦闘システムを簡単に紹介しよう。主人公の魔人パーティーは6人編成だが、基本的に戦うのは前衛の3名だけだ。後衛のキャラは控えとなるが、キャラによっては後衛から能力を使って戦闘を補助することもできる。

各カードに記載された数値は左側から「攻撃力」「防御力」「体力」「素早さ」となっている。「1d6」パーティーの「体力」の合計が「LP」だ。「LP」がゼロになるか、魔人が全て殺害されると全滅となり、死体はダンジョンの中に置き去りにされてしまう。ちなみに「1d6」というのは6面ダイスを1回振って出た数が数値となる。「2d6」なら6面ダイスを二回振った合計。「2d6+3」なら二回振った合計にさらに3を足した数字だ。

ダンジョン&ダンゲロスの戦闘システムは大変にシンプル。基本は以下の通りである。

1、敵味方入りまじり素早さの順に行動する。

- 2、自分の番になると通常攻撃か特殊能力（もしくはアイテム）を使う。
- 3、自分の攻撃力が相手の防御力を上回っていれば、差し引きした分だけ相手陣営のLPを減らせる。
- 4、さらに自分の攻撃力が「相手の防御力+相手の体力」を上回っていれば、その相手は死亡し、墓場に送られる。
- 5、どちらかの陣営が「全員死亡」「全員行動不能」「LPがゼロになる」までこれを続ける。

基本的にはこれだけで、これに魔人各自の特殊能力により様々な戦術が生まれる。「相手の防御力を無視して攻撃」「LPを直接減らす」「条件が整えば相手が即死」「敵の動きを止める」などなど。ランダム入手した魔人カードの中から、ステータスと特殊能力を鑑みつつベストなパーティーを組んでみて欲しい。

モンスターを倒した後はお楽しみの宝箱タイムだ。強いモンスターパーティーを倒せば、それだけ素晴らしいアイテムに巡り合える可能性が高くなる。ダンジョン&ダンゲロスには60種超の魔人カード、50種超のモンスターカード、20種超のアイテムカードを揃えているぞ！ それでは、既に完成している何枚かのカードを紹介しよう。



C あっちゃん・アキカン ♀

散
運 命
リヤク
メ



『も、もれちゃうメカ〜。』
<PAS> 死亡時、敵味方両陣営の
LPに3点ダメージ。



illustrated by 鳩子

C

狂木殺

♀



『眇の月』

<ACT> 自分含む敵味方全員に通常攻撃。

1d6
+1

0

4

3

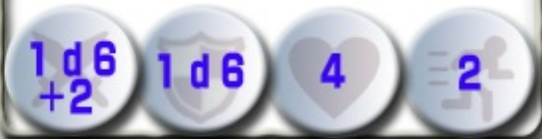
illustrated by 10

UC 白金翔一郎 ♀



『秘剣・鏡面殺』

<PAS> 相手から通常攻撃を受けると、後手カウンターで通常攻撃。



illustrated by 稲枝ケイジ

L1 モヒカンザコA 10♂



illustrated by 今日知ろう

L1 ゴブリンB

10
♂



1d3
+4

1

4

0

L2 野生のクマ

40

♀



『捕食』

<PAS> 敵を倒すごとにLPが2点回復。倒された魔人は即座にロストする。

1d6
+5

5

4

1

Item ロングソード



<装備> 攻撃力+1
ダンジョンでよく見かけるありふれた剣。

Rarity ★





<<シナリオ募集!!>>

ダンジョン&ダンゲロスでは追加シナリオを募集している。スターターセット（来月号にて公開予定）にはサンプルシナリオとして「#01 狂頭の試練場」が付属しているが、ユーザー各自が自由にシナリオを創作することが可能だ。シナリオ創作は簡単で、プロローグ、階層ごとのイベント、エンディングを設定するだけで良い。さらに手を加えたければ、魔人ダスの内訳を調整したり、魔人カード、モンスターカード、アイテムカードの追加、強力なボスを新たに産み出すなども可能だ。作ったくれた追加シナリオは今後の月刊ダンゲロスにて掲載させて頂きたい。また、魔人カードはダンゲロスのキャンペーンが進むごとに順次追加されていくことだろう。

なお、サンプルシナリオ「狂頭の試練場」は、次のページから紹介するロケット商会さんのSS「狂頭の試練場」を元にしたシナリオとなっている。こちらも併せてお楽しみ頂きたい。

本文：架神恭介（<http://www.pixiv.net/member.php?id=1149979>）

<あらすじ>ダンゲロスに突如として出現した、謎の迷宮。 チンピラ魔人・バルバロッサ土田は、生徒会長ド正義から迷宮探索を命じられる... 人格に問題のありすぎる魔人によるパーティー編成という最大の難事業に着手する土田は、迷宮の謎を解き明かすことができるか！

「戦闘破壊学園ダンゲロス 狂頭の試練場」

ダンゲロス学園生徒会長、ド正義卓也は開口一番に宣言した。

「と、いうわけで非常事態だ、土田くん」

「だろうな」

いまさら何を言い出すのか。なぜ自分がこの生徒会室に呼ばれたのか。ド正義は今回の非常事態でついに精神に異常をきたしてしまったのか。そもそも、ド正義は普段からどこか異常である。この事件がはじまってから、どうも神経の平衡を欠いているように思えてならない。

つまり、と、バルバロッサ土田は結論をくだした。

これから自分に振りかかるのは、とてつもなくロクでもない事態であろう。

「さて、もはや教職員から生徒にいたるまで、すでに知っているように」

ド正義卓也はデスクに肘をつき、祈るように手を組み合わせた。分厚い防弾眼鏡が逆光に輝く。

「三日前の午後、和戸教頭が魔人の能力を発現した」

「見りゃわかる」

バルバロッサ土田は生徒会室の窓からでも見える、校庭にぽっかりと開いた巨大な穴を見た。大空洞である。

噂に聞くところでは、職員室で携帯電話のアプリケーションでゲームに興じていた和戸教頭であったが、いきなり奇声を発して携帯電話を粉碎し、校庭へと飛びだして言ったという。三〇秒後、そこには巨大な洞穴が突如として出現していたとか。およそ三日前のことである。

このような意味不明な事態がまかりとおる可能性は、一つしか考えられない。すなわち魔人能力である。

いったい誰が最初に名づけたものか——いまでは、この洞穴は『狂頭の試練場』と呼ばれ、最奥部には狂った教頭の預金通帳と判子が眠ると、まことしやかな噂が流れていた。

バルバロッサ土田もその話は聞いている。とにかく一切かかわりたくない、というのが彼の直感的第一印象であった。

「我が生徒会も、あの迷宮を攻略すべく、すでに番長グループと一時的同盟を組み、一次探索部隊を派遣した。が、昨日の夜から連絡がとれなくなり、消息不明だ」

ド正義卓也は感情を抑えた声で、淡々と語る。

「そこでぼくは、彼らはロストしたものと考え、より強固な探索態勢を整えることを決定した。今朝のことだ」

「はあ……そう？」

我ながら間抜けな答えだと思った。土田ははやくも帰りたいという切実な願望にとらわれつつあった。猛烈に嫌な予感がする。

土田はダンゲロスに有象無象大量にうごうごと蠢く、チンピラ三下魔人のひとりである。生徒会長・ド正義や、番長・邪賢王ヒロシマの存在により、日常的に暴行・破壊活動など犯罪行為を行うような極めて過激なヤンキー活動は希望崎から一掃されつつある。

反面、それほど過激派でない中途半端なチンピラ魔人の存在は、全盛期の倍以上の増加をみせている。土田もまた、その典型的な一人であった。

これらのチンピラ魔人の素行をとりしめるのは生徒会の役目であり、今回、土田はその指導により呼ばれたと認識していた。この一カ月間、運悪く毎週のように風紀委員の正門前服装チェックに引っかかっている。ゆえに土田は、ド正義の恫喝を伴う叱責、および連続トイレ掃除当番などの罰則が適用されるくらいのことは覚悟していた。

——だが、この日のバルバロッサ土田の不運は、そんなレベルではなかった。

「それで、なんで俺が呼ばれたわけ？」

「きみに、生徒会に臨時新設されることになった、迷宮探索実行委員会の委員長に就任してもらう」

「お」

ド正義はそれまでの話の延長、まるで世間話の一節のように簡潔に述べた。土田は何か反論しようとした口の形のまま停止した。そのまま数秒間ほど沈黙していたが——、次の瞬間、ド正義の胸倉をつかんで、強引に立ちあがらせていた。

「おおおおお前、お前お前お前お前お前お前お前」

土田はデスクの上に足を乗せ、いつでもド正義を窓の外に放り出せる体勢をとった。

「知るか！ 生徒会でなんとかしろよ！」

「もはや事態は生徒会だけの問題ではない！ この緊急事態にあたり、番長グループと同盟を結び、混合探索チームを結成することになった」

ド正義は土田の魔人めいた腕力で空中につりあげられても、なお平然と中指で防弾眼鏡の位置を直した。

「第一次探索チームのいくつかの報告によれば、洞穴内部にはモンスターや邪悪な手芸部や、拳句の果てには転校生までうろついているという。万が一にもこの連中を外に出してはならない！」

「じゃあなおさら俺、そんなところ入りたくないんだけど！」

「きみが適任だ、土田くん。きみの能力が」

「うっ」

土田は低くうめいた。なんてこった。ド正義は土田の能力を勘違いしている。とはいえ、それは土田が誤解するように意図的にミスリードしているせいだ。

土田の能力は、《魔王日記》という。いわば『究極の死んだふり』である。呼吸から心臓、生命波動に至るまで、ありとあらゆる生命活動を止めることができる。この仮死状態からの復帰はタイマー式で、死んだふりに入る前に設定しておくことが可能である。ただし、この間に致命傷を受ければ、ごく普通に死亡する。きわめて役に立つ場面の限定される、はっきりと微妙な能力である。

しかし、土田の魔人としての素の防御力・生命力、身体能力の高さも手伝って、土田はこの能力を自己蘇生能力として演出することに成功していた。実際、ド正義の依頼はそれを当てにしたものであろう。

「あの一、俺、今日は草野球の助っ人に呼ばれてるんで……」

「おっと、きみはぼくにこう言わせたいのか？」

ド正義が髪の毛を掻きあげたので、土田は殴り倒したくなった。

「これは決定事項だ、と。断った場合、きみは速やかに拉致監禁され、生徒会に立つ柱の一つとなるであろう！」

「オゲェー」

こみあげる吐き気に、土田は己の運命を呪った。

土田は己の能力を、自己蘇生能力であると周囲に誤解させることで、狂人変態ひしめくこのダンゲロスでの身の安全をはかってきた。殺しても死なない相手を敵に回したいと思う者はあまりいない。

「もしやこれは」

脳裏にひらめくものがあり、土田は戦慄した。

「噂に聞くチンピラヤクザの鉄砲玉的任務」

「ハハハハ、心配するな、土田くん」

と、ド正義は唐突に笑いだした。

ちなみに、ド正義が『心配するな』とあって、本当に心配のいらぬ事態に陥ったことは一度もない。

「このために同盟した生徒会と番長グループだ、きみが同行させたい精鋭魔人を五人まで選ぶがいい。迷宮探索委員会は六人が限度だ。おっと、昨日遭難した一次グループを除いてね」

「すでに嫌な予感が」

土田には確信がある。事態はかぎりなく悪化し続けている。

「ちなみに、遭難したメンバーって誰よ？」

「生徒会からはエースくん、範馬くん、ファティマくん、ツミレくん。番長グループからは口舌院くんに鏡子くんだ！ 以上！」

「以上！ じゃねーよ！」

土田はド正義にアイアンクローをかけた。実際、そのまま握りつぶしてやりたい衝動にかられた。

「見事に強能力者だけ遭難させやがって！ あとはもうほとんど変態か、非戦闘員しか残ってねーじゃん！」

「ナハハハハ、フヒッヒッヒ」

「な、なんてこった、ド正義がヤケになってる！」

「おっと、ぼくを連れていくのは不可能だからな。ぼくは学内の治安維持になくってはならない存在なので、おいそれと迷宮に潜ることはできない」

「そもそも期待してねーよアホ」

ド正義の能力は人間には強力無比な力を発揮するし、あるいはモンスターにも効くかもしれない。だが、迷宮の中にあるとおぼしき罠に対しては完全に無力だ。園芸部や手芸部など、まともな生命を持っていない連中にも効かない可能性はある。

さらにいえば、ド正義の能力は完全に後手対応のものである。先手必勝が求められるダンジョン探索では、それは致命的な遅れになりかねない。

「くそっ、番長グループからも腕の立つ奴を拾ってくるしかないか。でも俺、番長グループって苦手なんだよな……なんか体育会系で……」

「大丈夫だ土田くん、きみは中立属性だから、番長属性ともうまくパーティを組めるさ。それゆえの人選だ。生徒会でも番長でもない魔人が委員長になることに意義がある」

ド正義は言い聞かせるように語りながら、デスクの上の名簿を指差した。土田はつられてそちらに目をやった。

「さあ、その魔人名簿から選びたまえ！」

「……えー」

「ちなみに、どんな状態になっても全滅のみ免れて帰ってくることができれば、青森県イタコテクニカルセンターから召喚した死者蘇生能力者により、ある程度の復活は可能だ。慎重に選びたまえ」

「ある程度ってどの程度なんだ」

かつてここまで脳を回転させたことがあっただろうか。土田は名簿を荒んだ目で見つめ、必死で状況打開のための作戦を練り始めた。こんなときに役立つ魔人は——いや、一緒に迷宮に入り、無事に出てこられそうなメンバーは——

土田は脂汗を流しつつ沈黙考していたが、時計の分針が半周ほど回ったあたりで、ようやくド正義の胸倉を解放した。

「わかった。とりあえずこれから言うやつを集めてくれ」

「——予想以上に広いな」

白金翔一郎は洞穴の奥に目を凝らした。電気式のカンテラの薄明かりが照らす射程から外れると、そこはもう真の闇があった。

「暗いが、足場は悪くない。校庭の地下とは思えないが、戦闘には支障がなさそうだ」

そして、何度か地面を踏みしめて足場を確認すると、ようやく土田を振り返る。

「まあ、お前の話はわかった。結論としては俺たちというわけか」

「悪いな。怨むなら俺とド正義を半分ずつにしてくれ」

土田はカンテラの光量を調節し、目盛を最大にした。電池の寿命は短くなるが、可能な限り視

界を確保することによるわずかなアドバンテージには代えがたい。特に、ここに存在しているのは、この洞穴の暗闇に適応した者たちであろう。

「気にするな」

翔一郎は憂鬱な、しかしはっきりと決意した顔でうなずいた。

「言われずとも、自分から志願していた。口舌院が遭難したと聞いたときから、俺が行くつもりだった」

「そうかい」

結局のところ、白金翔一郎とはそういうキャラクターだと、土田は理解している。いささか現代常識に疎い、いや、疎すぎる部分はあるが、番長グループの中でも比較的話が通じる相手である。より簡単に言えば、バルバロッサ土田にとっては、

「それに、友達の頼みだからな」

翔一郎はすこし笑い、腰に吊った日本刀の柄を叩いた。

《迷宮探索委員：その2》 白金翔一郎

所属：番長グループ

職業：侍（前衛）

備考：イケメン

「白金翔一郎……、なんて頼りになるやつなんだ」

土田は心の底から、この男まで遭難していなくて良かったと思った。

実際、土田にとっては現在唯一とっていいほど頼りになる人材であった。特に、戦闘能力だけではなく、人格という面において。土田は力いっぱい白金の肩を掴んだ。

「白金、マジで頼りにしてるからね！ ね！」

「つ、土田、目が血走っているぞ。どうした」

「いや俺、この変態集団と一緒に洞窟の中にいると思うと、怖くて怖くて」

「ああ——」

白金が隣に視線を移した。そこには、なにもない虚空の暗闇をみつめ、ぼんやりと笑っている一人の少年がいた。

「うふ」

少年の半開きになった口から、よだれと微かな笑い声が漏れた。彼が見つめている壁面を、何かか蠢いた気がする。イモリだろうか？ それもぬらぬらと光るような、真っ白い体色であったように見えた。

「うふ、うふふふふ——」

彼の名を夢見崎アルパ。どこからどう見ても変態であり、そしてここは由来不明の洞窟の中だ。よくわからない場所によくわからない理由で佇む変態、これすなわち、間違いなく魔人である。

白金は虚空を見てだらしなく笑うアルパを指差し、小声で土田にささやいた。

「おい。夢見崎を連れてきて、本当に正解だったのか？」

「俺も十秒に一回くらいその疑問に苛まれる」

土田はアルパの半径一メートル以内に近づかないことを誓っていた。

「しかし、こいつの生命力はゴキブリの比じゃないからな」

夢見崎アルパは、しぶとい。どのくらいしぶといかというと、ティラノサウルスに捕食されても生還を果たし、ダンゲロス最大のビッチ・オブ・ビッチである鏡子をして『疲れた』と言わしめたほどだ。

土田も生命力と頑丈さには学園で十指に入るくらいの自信はあるが、アルパは桁が一つか二つくらいは違う。おそらく、接敵時には最高の壁になってくれるはずだ。

「まあ、若干きもちわるいだけで害は無い……と思う。思いたい」

《迷宮探索委員：その3》 夢見崎アルパ

所属：生徒会

職業：変態（前衛）

備考：ド変態

「それより問題はあっちの方だ」

土田は後方を指差した。

『ウィィー————ィイン！』

鈍い電動音、そして続く、ガリガリという掘削音。まるで工事現場である。土田と白金は思わず耳をふさいだ。騒がしすぎる。

「あはっ」

回転する右腕。鈍い銀色に光るそれは、生身ではない。ドリルである。女子高生の右腕がドリルと化し、洞窟の壁に猛然と穴を掘っているのであった。

「あはっ、あははははは！ こ、工事！ 掘削工事！」

彼女の顔は洞窟の薄暗がりとは対照的に、底抜けに明るい。ドリルで岩盤を強引にくりぬいたかのような明るさ。これほど天真爛漫な女子高生が実在するだろうか？ 片腕がドリルの？ そして彼女は明らかにその掘削行為で、なんらかの性的興奮を得ているようであった。

洞窟で掘削行為で変態。三つそろえば紛れもなく魔人である。

「あ、あれは？」

白金翔一郎は明白に怯えた目で尋ね、土田は首を振った。

「螺旋院ドリル……、一年生。見てわかると思うが、すでに手遅れな魔人だ。右腕はドリルだが、あれ、じつは飛ぶから。射撃武器だから。戦闘中は気をつけろよ」

「なんて手遅れな女子だ」

「あはっ、あは！ あはははは——フウウ……！」

不意にドリルの掘削音と、回転が止まる。螺旋院ドリルと呼ばれたその女子は、ドリルを壁から引き抜くと、今度は不意に土田の方を振り返った。それはホラー映画の殺人鬼が、隠れている犠牲者を喜々として見つける動作に似ていた。

「ああ……土田先輩、ありがとうございます。こんな素敵な工事現場に連れてきていただいて……！」

「いえいえ」

土田は少し彼女との距離をとりながら、今度はぎこちなく首を振った。

「お、お気になさらずに結構だぜ」

「私、もう早くなんでもいいから掘削工事したくて。生物でも岩盤でも鉄鋼建築でも、あっという間に穴だらけにしてみせますよ！ あはっ、あはははは！」

「わー……頼もしーい……」

彼女の輝く瞳と言葉が意味するものを、土田は正確に理解していた。螺旋院ドリルにとって、その右腕が貫く対象はなんだっていいのだ。たとえ仲間の頭蓋骨でも内蔵でも、彼女の掘削願望は満たされるであろう。

《迷宮探索委員：その4》螺旋院ドリル

所属：生徒会

職業：掘削工事業者（後衛）

備考：掘削マニア

「一応、聞いておこうと思うが」

ここまでの流れで不安を覚えたのか、白金は螺旋院の隣でぴちぴちと蠢く、謎の触手を示した。

「あれは本格的に何なんだ？ みたところ、その……軟体生物、のようだが……」

「正しい」

土田は意図的に視界に入れないようにしていた、その触手の主にやむをえず目をやった。洞窟の薄暗がりでもぬるぬると蠢く大きな八本の触手。デビルフィッシュ、巨大タコである。しかも触手のうちの二本は、ときおり火花を散らしながらまばゆい白色に輝いていた。

『ピギイイー——！』

巨大タコは甲高い鳴き声めいた音をたてた。いったい如何なる器官からその音を発しているのかは定かではない。

「やつの名は、フジ・オクトパス」

土田は手持ちの鞆の中から、一匹の新鮮なサバを取り出し、フジ・オクトパスの前に放った。

「とある研究所が制作した、アニマル魔人。研究職員を皆殺しにして、絶賛逃走中」

フジ・オクトパスは白くうねる触手を伸ばし、まだ空中にあったサバを正確にとらえると、すばやく体内に突っ込む。ぐっちゃ、ぐっちゃと捕食する音が洞窟に木霊した。そして若干カン高くなった謎の鳴き声。

『ぴいあ——！』

「このように、好物である新鮮なサバを与えてくれる人物によく懐く」

「わー。かわいいですねー！ 掘削したいチューーン」

螺旋院は目を丸くしてフジ・オクトパスの捕食シーンを眺める。最後のチューーンは、洞窟の

壁を再度掘削しはじめた右腕のドリルの音である。

白金はひどく困惑した様子で眉をひそめた。

「かわいい……のか？ 女子のセンスはよくわからんな」

「とにかく、ひとつわかることは、やつの食糧であるサバが切れたら、全速力で逃げるこった」

「承知した。ちなみに、あの二本の光る触手は？ 火花が散っているように見えるが」

「魔人能力により、人間を即死させるレベルの電撃を撃ち出す。らしい」

《迷宮探索委員：その5》フジ・オクトパス

所属：なし

職業：タコ（後衛）

備考：サバ中毒

「と、いうわけで、頼りになるのは白金、お前と——」

「ああ」

白金は最後の一人、傍らで日本刀を片手に佇む少女を見た。

「よろしく頼む、一刀両」

「——はいっ！」

生徒会最強の剣豪女子高生。一刀両断は、指が白くなるほど強く太刀を握って答えた。並々ならぬ決意が見て取れる。

「わ、私、全力でお相手します！ こちらこそよろしくお願ひします、白金先輩！」

「そうか。当てにさせてもらうぞ」

白金があまりにも爽やかに笑うので、土田は本日何度目になるかわからない不吉な予感を覚えた。

《迷宮探索委員：その6》一刀両断

所属：生徒会

職業：侍（後衛）

備考：隙あらば白金と殺しあいをしようと考えている

とにかく、じっとしていても始まらない。土田はカンテラを掲げ、一同に声をかける。

「よーし、みんな、十分キャラは立てたか？ そろそろ行くぜ。マッピングは俺がやる」

「承知した」

「了解です！ どこを掘りますかっ？」

「掘るな。通路を前進だ」

『びぎ——！』

「テメーはさっきサバ食ったばっかだろ、せめて五分は我慢しろよ」

「壁掘ったら出てくるかもしれませんよ！」

『ぴーっ、ぴいあーっ！』

「こねーよ、アホ！」

「土田、胃薬は必要か？ 俺はさっき服用した」

「……頼む」

洞窟の暗がりや、まばゆい電気灯を頼りに歩き始める一同。洞窟は3人が余裕をもって横に並べる広さがある。故に後衛として土田、螺旋院ドリル、フジ・オクトパス。前衛は白金翔一郎と、アルパ、そして――

(こ、これは、もしかして)

白金の隣を、少し足音を控えめに歩く一刀両は、内心の興奮と緊張を抑えきれずにいた。

(白金先輩と……真剣勝負を挑むチャンス……！)

土田のようなアホチンピラの預かり知らぬことではあるが、一刀両断は白金に恋する女子高生剣豪である。彼女にとって最大の望みは、敬愛する魔人剣士である白金翔一郎と、互いの技量を尽くした真剣勝負を行うこと。

とはいえダンゲロスには生徒会によって統制された、法治領域である。むやみやたらと魔人が殺しあいを行うのは当然のごとく禁止されている。

だいいち、白金に、

『私と真剣勝負をしてください！』

などと、気軽には言えぬ一刀両の乙女心であった。しかし、今ならば話は違う。もしも、もしもこの洞窟内にモンスターが現れたとしたら。一刀両は、日本刀を握る手に、自分でも抑えきれない力がこもるのを感じた。

(突然の遭遇に動揺して、うっかり白金先輩に斬りかかっちゃう……なんてハプニングもあり…
…かも……)

一刀両断、一六歳。明白な殺害計画である。

(手が滑ったふりをして斬撃、手が滑ったふりをして斬撃、手が滑ったふりをして斬撃、手が滑ったふりをして斬撃……)

心の中でイメージトレーニングを行い、その瞬間に滑らかな動作に移れるよう、何度も繰り返す。

そして、その願いは、最初の曲がり角で唐突に現実のものとなったのだった。

「あぁっと！」

土田は思わず叫んでいた。

曲がり角を曲がった途端に、異形の影が単身突進してくるのが見えた。それは、どこからどう見てもモンスターであった。牛の頭を持ち、錆びの浮いた戦闘斧をかかげた巨漢。土田の現代っ子としてのゲーム知識が、その存在の正体を告げていた。

「み、ミノタウロスだ！」

「なんだ、こいつは」

現代っ子としての知識が皆無である白金翔一郎は、しかし、それでも超一流の剣豪である。肩をひそめつつも、抜刀して怪物の突撃に備えようとしていた。

「一刀両！ やるぞ！」

アルパは中途半端にへらへらと笑いながら、ぼーっと突っ立って怪物の突撃を眺めている。こいつは当てにはできないが、相手が異形のモンスターであれ、自分と一刀両がいれば一匹くらいなら問題なく対処できる。

まさに過信であった。

「俺が動きを止める。一刀両は首を落とせ！」

「は——」

一刀両断は荒い呼吸を繰り返しながら、刀の鯉口を切った。

「はいっ！ よ、よろしく願います、白金先輩……わーっ手が滑ったー！」

「うおおっ？」

一刀両の後半の台詞は、まったくの棒読みであった。電光石火の抜刀、そして斬撃。一刀両が白金に対して放ったそれは、まったく見事な居合抜きといえた。並みの人間、いや、魔人といえど、なすすべなく首を切り落とされていたであろう。

しかし白金はそれら凡百の魔人とも一線を画する、最強クラスの剣豪である。なぜか自分に向けて放たれた一刀両の居合を、こちらも抜刀して鍔元で受け切っている。かっ、と鋭い火花が散った。

しかし、そこまでであった。

「な、なにをしている一刀両——ぶっ！」

『フゴ————ッ！』

雄叫び、そして鈍く湿った打撃音。背後から迫っていたミノタウロスの戦闘斧は、一刀両の太刀を受けて動きを止めた白金の頭部を乱暴にたたき割っていた。

「ああっ」

一刀両の顔が瞬時に青ざめる。飛び散った白金の血が、あるいは脳漿が額にかかった。

「白金先輩っ！」

「なにやってんだアホかー！」

土田は発作的に頭をかきむしった。

初戦闘にして死者—— 一名。白金翔一郎。

白金の遺体にすがりつく一刀両は果たして声もなく泣いているのだろうか？ いや、その表情はよく見えないが、とにかく精神的に多大なダメージを負っているのは間違いない。

「こいつは参ったぞ」

土田は現状を省みた。

白金を殺害したミノタウロスは、直後に螺旋院ドリルが穴だらけにして虐殺した。本人が言うところの『掘削工事』であり、いま、螺旋院はその余韻にひたって意味もなく右手のドリルを何度も着脱している。

フジ・オクトパスはまったく働いていないにもかかわらずさらに一匹のサバを要求・捕食し、

アルパはまったくかわらず天井のあたりを見つめてへらへらと笑っていた。控えめに表現すれば、もしかすると人選を間違ったかもしれない。

「ここで引き返して白金を蘇生させてもらうか」

予想外の事故だ。ド正義は罵倒するかもしれないが、命にはかえられない。

青森イタコテクニカルセンターで修業したイタコとは、いわば同系統の妄想を共有して訓練することで、半ば人為的に魔人化を試みている集団である。欠損した人体まで構築して蘇生させる能力を持つという。

「一刀両、引き返すぞ。白金を蘇生させる、そいつを——ん？」

言いかけて、土田はミノタウロスの穴だらけの死体の横に、箱状の何かが転がっているのを発見する。

——宝箱。

そうとしか言いようのない形状の木箱であった。箱の中央には錆びた錠前のようなものが取り付けられ、ちょっと衝撃を与えれば、いまにも開きそうに見える。土田は何の気なしにその錠前に触れた。

「っと」

よほど劣化していたのか、錠前は触れた瞬間に崩れ落ちた。

「お、おいおい、まさか」

元来、土田のメンタリティはどこにでもいるチンピラである。錠前が壊れていたという幸運、そして謎の宝箱。うっかり開いてしまったのは、ほとんど発作的な行動であり、これを魔人医学界ではチンピラ症候群と呼ぶ。

その瞬間！

『ビー———ッ！　ビー———ッ！』

けたたましい警戒音が響き渡り、土田が慌てて手をひっこめたときにはすでに何もかもが手遅れであった。

「え？」

突如として鳴り響いた警戒音に、振り返ろうとした一刀両断の首が不思議そうな顔のまま地面に落ちた。

一瞬のことである。黒い装束が翻り、空中に銀色に光る糸と、それから針が見えた気がした。疾風めいてあらわれたその人影に、土田の背筋に冷たい汗が湧きだした。

黒衣、覆面、針、糸、腰にぶらさげた手芸キット。ここまでそろえば、もはや間違いは無い。

「——手芸部かっ？」

「魔人、死すべし」

手芸使いの人影は冷たく人間離れした、動物的な抑揚で答えると、次の瞬間には跳躍している。

まったくの油断と呼ぶ他ない。土田の脳裏をド正義の言葉がよぎった。洞窟内部には、野良手芸者も徘徊している……。

野良手芸者とは、手芸部を退部した者たちの総称である。手芸部は退部者に対して無慈悲な追

っ手を差し向け、その手芸術が外部に漏らされることを死によって封じる。それら手芸部の追っ手との日常的な死闘により、多く野良手芸者は単なる殺戮マシンと化し、近づく者を問答無用で攻撃する非人間的的存在となってしまうのであった。

『ピギ！』

「あっ」

フジ・オクトパスと螺旋院の短い——悲鳴ともつかぬ悲鳴が響き、生首が宙を舞った。フジ・オクトパスは一瞬で刺身と化した。単なる針と糸だが、手芸者の手によって装備されたそれは、一撃で相手の首をはねる武器となるのである。

気づけば、パーティで生き残っているのは土田とアルパだけであった。野良手芸者の、冷たい瞳が覆面の奥で光り、とてつもない速度で土田に向かってくるのが見えた。

「うおお！」

土田は伏せて回避しようとするが、これもまた一瞬遅かった。ばつん、と体のどこかで何か切れるような感触が伝わり、立っていられなくなった。体のバランスが急激に崩れる。厄日だ、と土田は思った。攻撃された、しかし、どこを？ いや、考えている暇は無い。最後に望みを託す方法が一つある。

その間、実に一秒にも満たなかったかもしれない。

黒い影が残ったアルパに尋常ならざる速度で襲いかかろうとする。間もなく自分は地面に倒れる。なにをどう攻撃されたのかすらわからないが、もしもこれが致命傷でなければ、あるいは——

土田は瞬時に能力を発動させた。《魔王日記》という。この究極の死んだふりで、あの野良手芸者を騙すことができれば、生還の望みもあるかもしれない。意識を手放しかけた土田の視界で、手芸者が振りかえったような気がした。

——翌日、ダンゲロス学園掲示板に、以下のような募集文が貼り出された。

『第二次探索委員長：バルバロッサ土田 地下一階にて野良手芸部（1）により全滅！』

『第三次探索委員会を大募集！ IN 生徒会！』

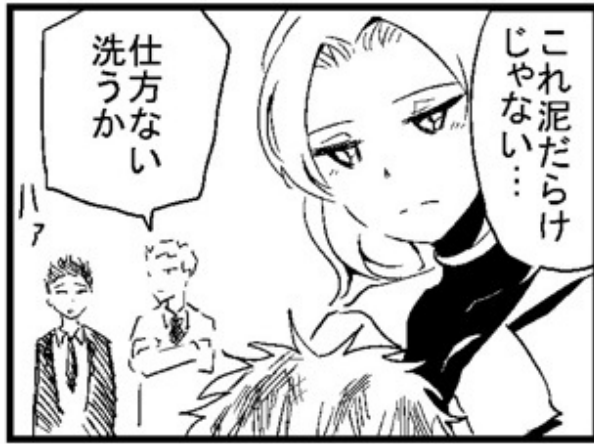
『きみの好きな六人の魔人を集めて、探索チームを結成！ その組み合わせは無限大！』

『ぼくと契約して、狂頭の試練場に潜る冒険者になろうよ！』

(みなさんによる続編を希望です)

転校生

♀つるダンゲロス







ダンゲロスご唯一
エロイと思った
シーン



チンパイ





(イラスト：稲枝ケイジ)

夢見崎 アルパ

性別：男(XY)

所有武器：カッターナイフ

攻撃力：7 防御力：11 体力：6 精神力：0 異常恋愛：6

特殊能力：「キミとボクの二人の世界」

能力発動後、夢見崎 アルパが効果範囲内に入るように発動された最初の能力に対してカウンターで先手発動。

その能力の対象を夢見崎 アルパにかえる。

能力発動後、カウンターをした相手に対して恋をするためその相手に攻撃を出来ない。また、その相手がなんらかの理由で戦線離脱した場合、夢見崎 アルパもあとを追って戦線離脱する。

[発動率103% 成功率100%]

キャラクターの説明

惚れっぽくて夢見がちで倒錯的な普通の高校生。

惚れた相手には一途で、路上で人殺しをするような同級生（男女問わず）に惚れて、いつか解体し殺されたいと願っているぞ。

趣味は死ぬ気の自傷。特技はそれでも死なない頑丈な肉体。チャームポイントは誰彼かまわずすぐ惚れる薄弱な精神力だ！

ダンゲロスには運命の魔人を探しすためにやってきたぞ。

鏡子

性別：女

所持武器：鏡

攻撃力：0 防御力：0 体力：8 精神力：2 豊富な経験：20

特殊能力：『ぴちぴちピッチ』

鏡を通して全MAP上任意のマスへ自分の腕を出現させ、豊富な経験に基づく技を駆使し任意の一体を刺激し興奮させる。精神力ダメージ4ポイント。初期位置でしか使えず、能力発動後、移動不可。マスに一人の時しか使えない。能力を使用するたびに体力-2。

[発動率：87% 成功率：100%]

キャラクターの説明：

三つ編み眼鏡の気弱色白根暗無口。制服は校則通りの膝丈きっちり。眼鏡を外すと美人だとかそうでないとか。

月刊ダンゲロス #02 (2011年6月号)

<http://p.booklog.jp/book/27824>

「月刊ダンゲロス」は、主にpixivにてアップロードされた二次創作小説、イラストを元に編集、創作されます。

今後、pixivにアップロードされた著作者様にご連絡させて頂くことがあるかもしれません。

よろしければご協力お願いいたします。

本文：架神恭介、ろれるり、ロケット商会

イラスト：稲枝ケイジ、今日知ろう、ε

編集：架神恭介

発行所：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27824>

ブックログのパー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27824>